評価反応の獲得と選好への転移
—言語レスポンデン特条件づけと仮想清涼飲料水を用いて—
恒松 伸
（立命館大学文学部）
キーワード: 言語レスポンデン条件づけ、評価反応、選好
 Acquisition of evaluative responses and transfer to preferences
Shin TSUNEMATSU
(Faculty of Letters, Ritsumeikan University)
Key words: verbal respondent conditioning, evaluative response, preference

【目的】正または負刺激と対提示されることにより、中性刺激に対する選好が変化することを評価条件づけという。また、言語レスポンデン条件づけ（verbal respondent conditioning）は、この条件づけの一種であり、(1)単独で評価反応（evaluative responses）を誘発するCSとして Staats & Staats (1957) と同じ正・中立・負の単語を用いることと、(2)条件づけ試行において、無意味語（NS）と単語（CS）の対提示直後に、同じ単語を提示者に音声出力させた手続きを用いることを特徴とする。恒松・中前・福間（2009）は、(1)の特徴を保持したまま、試験日に音声出力を求める対提示のみの手続きを用いて、無意味語に正・中立・負の評価反応が獲得されるか、または、獲得された場合、それが、仮想清涼飲料水の選好に転移するかを調べた。その結果、無意味語と単語の組み合わせが異なる2つのグループに共通して、評価反応の獲得が確認され、完全な選好転移がみられたのは1グループのみであった。また、研究の目的や観察の方法（以下）が検出されなかった参加者の割合が少なく（70%）、個人レベルで条件づけが成立した参加者の割合が少なく（46%）という問題も生じた。そこで、本研究では、単語の選定と提示回数、対提示の時間的関係を変更し、再度、恒松・中前・福間（2009）と同じ目的で、実験を行った。

【方法】（参加者）実験歴のない大学生 139 名が参加した。このうち実験目的のデータの提供に同意し、かつ、記録用紙に不備のない117名をデータ分析の対象とした（材料）事前に、別の大学生を対象に Staats & Staats (1957) で用いられた60個の単語に対する好ましさのイメージ調査を行った。本研究では、その調査結果にもとづき、正、中立、負の単語として最も適切な9、12、9個の単語を選定して、条件づけ試行で使用した。一方、単語と対提示される無意味語をしぼりとしてQHX、BZS、RJGの3つを用いた。さらに、各無意味語に対する条件づけの程度と選好への転移を測定するため、記録用紙を準備した（実験計画）無意味語及び単語の組み合わせの違いにより、参加者は、A（58名）とB（59名）グループに無作為に割り当てられた。手続きは2グループともに、正、中立、負の合計30個の単語から、無意味語を2回ずつ対提示された。すなわち、条件づけ試行は60試行より構成され、1試行につき1個の無意味語（NS）と1個の単語（CS）が、この順で、スクリーン上に1.5 秒ずつ示された。刺激間隔は0.5秒で、試行間隔は2.5秒であった。Aグループでは、60 試行のうち、QHX (RJG) は正 (負)の単語と18 回対提示された。BZSはノイズ（フィヤー刺激）と2 回対提示された。また、BZSは中立の単語と2回対提示された。一方、B グループでは、QHX と RJG に対する正・負の単語の組み合わせがAグループと逆であった。条件づけ試行終了後に、記録用紙を用いて、各無意味語に対する条件づけの程度と選好への転移を測定した。前半で好ましきもの7段階尺度を、後者では各無意味語が印刷された清涼飲料水の棒線に対して。

Table 1 Means and standard deviations of semantic differential ratings of each syllable

<table>
<thead>
<tr>
<th>Group</th>
<th>M</th>
<th>SD</th>
<th>M</th>
<th>SD</th>
<th>M</th>
<th>SD</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A (N = 44)</td>
<td>5.32</td>
<td>1.55</td>
<td>4.11</td>
<td>0.88</td>
<td>2.50</td>
<td>1.50</td>
</tr>
<tr>
<td>B (N = 46)</td>
<td>5.50</td>
<td>1.50</td>
<td>3.93</td>
<td>1.11</td>
<td>2.74</td>
<td>1.65</td>
</tr>
</tbody>
</table>

各参加者の7段階尺度の評定結果に対して、最も好ましくない群から順に1点から7点を与えた。Table 1 は各無意味語に対する評価値の平均と標準偏差を示したものである。グループ(2)×無意味語(3)の分散分析を行ったところ、無意味語の主要効果(F2, 176) = 74.09が1%水準で有意であった。LSD 法を用いた多重比較によると(αse = 2.36, p < .05)、正の単語と対提示された無意味語の平均評価値は、中立および負の単語と対提示された無意味語の平均評価値は、負の単語と対提示されたそれよりも有意に大きく、中立の単語と対提示された無意味語の平均評価値は、負の単語と対提示されたそれよりも有意に小さかった。これらの結果より、評価反応の獲得が確認された。さらに、獲得された評価反応が、仮想の清涼飲料水の選好に転移するかを調べるために、グループごとに各参加者の選好順位の結果を集計した。そして、3つの無意味語を2つずつ対して、ウィルコクソンの符号順位検定を行った。その結果、Aグループでは、すべての組み合わせで選好順位に有意な差がみられた（QHX と BZS: Z = -3,10, p < .002；QHX と RJG: Z = -4,32, p < .001；BZS と RJG: Z = -2,66, p < .008）が、Bグループでは、2つの組み合わせで有意な差がみられることとなった（RJG と BZS: Z = -2.73, p < .006；QHX と RJG: Z = -2.85, p < .004；BZS と QHX: Z = -0.54, n.s.）。すなわち、期待された完全な選好転移は、Aグループのみで確認された。

先述の単語の選定と提示回数、および、対提示の時間間隔の変更により、恒松・中前・福間（2009）に比べて本研究では、意識性が検出されない参加者の割合を71%から77%に、そのうち個人レベルで条件づけが成立した参加者の割合が46%から54%に、増加させることができた。しかし、選好への転移が難しいという問題がなかったことから、この問題を解決するためのさらなる手続きの改善が求められる。